JASE
現代性教育研究ジャーナル
2011年
No. 1
2011年4月15日（毎月15日）発行
財団法人 日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info@jase.or.jp URL http://www.jase.or.jp 発行人 松本清一 編集人 本橋道昭
© JASE. 2011 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

JASE関西性教育研修セミナー2010冬講演要旨
「性科学／教育の過去・現在・未来」…… 1
北丸雄二のニューヨークリポート① …… 6
「ありのままのわたしを生きる」ために① …… 7
今月のブックガイド …… 8
JASEインフォメーション …… 9

性科学／教育の過去・現在・未来

ハワイ大学医学部教授　ミルトン・ダイアモンド

「次世代に語り継ぐ SEX & SOCIETY（性と社会）」をテーマに、ミルトン・ダイアモンド博士と池上千寿子氏を講師に招いて、2010年12月12日、大阪・梅田で「関西性教育研修セミナー 2010 冬」が開催された。そのミルトン・ダイアモンド博士の講演要旨を掲載する。

私の研究歴もずいぶんと長くなりますが、最初に扱ったのはモルモットです。当時、性科学を専攻している人はおらず、関連する研究領域といえば、生殖に関するものぐらいでした。

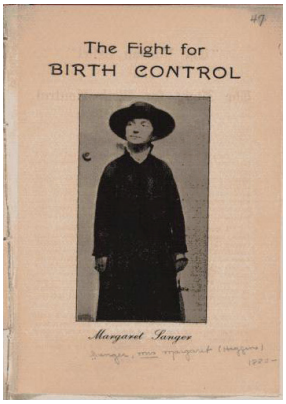
1930 年代、ナチス政府によって焚書が行われました。ドイツには、有名なセックスに関する図書館がありましたが、セックスに関する本というのは、すべて燃やされてしまったわけです。

この絵（資料1）は、米国のコムストック法（1873 年）に関連するものです。コムストック法とは、「反道徳的な使用目的での猥褻文書と物品の取引・流通の禁止法」といって、性に関するあらゆるもの（書物や避妊や人工妊娠中絶に使われる道具や論文、広告や情報など）を郵便規制する法律です。ニューヨークで「悪徳撲滅委員会」を組織したコムストックらが推進しようとしていたのは、結婚まで性交渉をしてはならないという禁欲主義です。

資料1

彼らが使った基本戦略は、「セックスをすれば、淋病、梅毒に罹患しますよ」という脅しでした。その一例としては、精巣が縮んだ状態の絵があり、「マスターベーションするとこんな風に精巣が縮んでしまうぞ」と脅すわけですね。もちろん、嘘です（笑）。

この本（資料2）は、家族計画の推進で非常に有名なマーガレット・サン



資料2

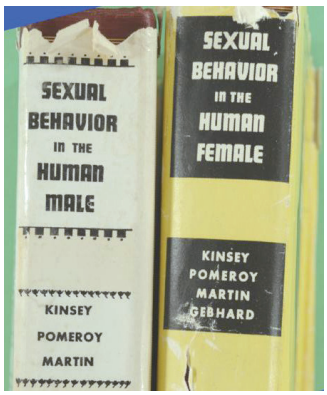
ガーによって書かれたものです。彼女は1914年に月刊誌『ウーマン・リベル』を発刊するなど、避妊への意識向上を図る活動を始めましたが、コムストック法で起訴され、1915年に英国へと向かうことになります。当時は、家族計画の推進すら違法だったのです。勉強したり、公に情報提供してもよいとされたのは、妊娠中の胎児の成長といった、妊娠に関することぐらいで、どうやったら妊娠に至るのかといったことに関心をもつべきではない、とされていました。

■性を科学する時代の幕開け

しかし、アルフレッド・キンゼイ（資料３）が活躍した1940～1950年代から、少しずつ事態は変わり始めます。彼は、大学の要請で結婚や家族に関する授業を担当していました。結婚や家族の話といっても、学生はもちろん、セックスに関する質問もしてきます。そうした学生に対して彼は、「私にはわからない。これは調べなければならない」と答え、調査を始めたのでした。

資料３

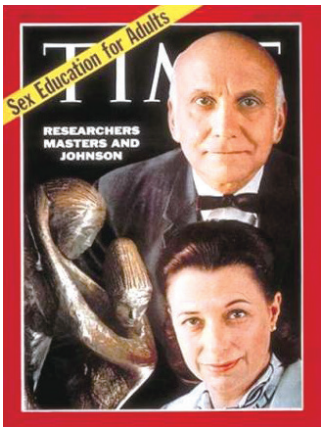
彼らの調査研究の成果として出版されたのが、『男性の性行動』(1948）と『女性の性行動』(1953）の２冊です（資料４)。この２冊は、後に『キンゼイ・レポート』として有名になりました。当時の性に関する調査研究といえば、もっぱら寝室で起こることに関心がもたれていましたから、ジェンダーに関連する事柄やジェンダー・アイデンティティといった話題は扱われていません。



資料４

こうしたキンゼイらの研究に対して、社会は非常に早い反応をみせましたが、そのほとんどが否定的なものでした。

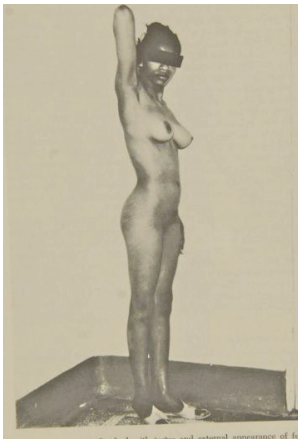
1960年代と1970年代には、マスターズ＆ジョンソン（資料５）による人間の性反応に関する著書が相次いで出版されました。こうしたキンゼイやマスターズ＆ジョンソンらの研究によって、米国社会にも変化がみられるようになりました。性について、適切に、しかも科学的に研究することができる、と考えられるようになってきたのです。



資料５

1965年には、画期的な判決が下されています。それより以前、といってもそれほど大昔の話でもないわけですが、結婚している夫婦に対してすら、医師が避妊の情報提供をすることが法律上違法であるとされていました。コネティカット州の家族計画連盟重役だったエステル・グリズウォルドは、このことで有罪判決を受けましたが、1965年の連邦最高裁で「プライバシーの権利」を理由に逆転無罪を勝ち取りました。

私が最初に教職に就いたのは、ケンタッキー州のルイスヴィル大学医学部で、この写真（資料６）の方は、私が最初に出会ったインターセックス当事者です。染色体型はＸＹで精巣もあるのですが、腕を上げた脇には毛がありませんし、非常に女性的な外見であることから、「ふつう」ではないと言われて、私のところを訪ねてこられました。当時の社会は、性について「見ざる、言わざる、聞かざる」という態度が大半を占めていましたから、こういう状態についての研究がなく、生殖および内分泌の研究をしていた私に紹介されてきたわけです。


資料６

■性と社会と政治

私が医学部の学生を対象に教えていた性に関する授業（資料７）は、当時としては珍しいものでした。後に、より多くの医学部がこうした授業を開講するようになりました

資料７

が、全国的にも最初期の１つだったと思います。医師や医師になる学生が性についての知識をもつことは、もちろん大切なことですが、私は、子どもや若者も性についての知識をもつべきだと考えました。

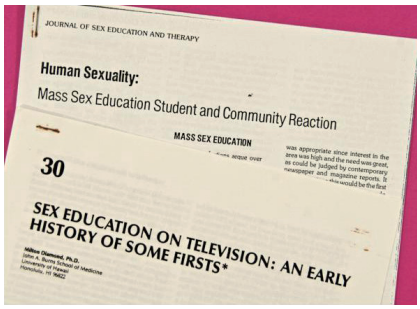
しかし、どういった性教育が提供できるかというのは、時の為政者の態度や考え方にも大きく影響されます。たとえば、ブッシュ前大統領は性教育に否定的で、家族計画、人工妊娠中絶、そして性教育に対して、さまざまな制限を加えました。それに対して、オバマ大統領の態度はだいぶ違います。彼は、家族計画、そして統合された性教育を支援する姿勢を示しています。

一方で、教師の多くにまだ保守的な考えがみられるという問題もあります。性について授業をすることは構わないけれども、教える内容は禁欲であるべきだ、という態度は根強くあります。しかし、ある調査では、一般大衆の 76％が性教育（包括的セクシュアリティ教育）が望ましいと答えています。

ハワイは最初に人工妊娠中絶を合法化した州の１つですが、中絶が米国社会の大きな関心事となったのは 1970 年代のことです。1967 年にハワイ大学医学部に転任した私も、性と家族計画、性教育との関係について研究を始めました。

研究していくうちにわかったことは、中絶はだれにとっても深刻な問題であり、簡単に人工妊娠中絶という結論を導き出す人はいない、ということでした。1971 年に発表した論文（資料８）で私たちは、（禁欲を強制するばかりで、中絶を違法とする）政府こそが法律違反をしている、という考え方を示しました。

さらに 1970 年代には、私は性について教える別の方法を思いつきました。テレビを利用した授業です。ハワイ大学が、テレビで放送された性教育を正式な授業として認めてくれたおかげで、学生に単位を出すこともできました。時代は変わりつつありました。



資料８

■ 性と文化

時代における変化だけでなく、性については文化によってさまざまな違いがある、ということを常に心にとめておかなければなりません。性教育や性に対する考え方や態度には、異なる文化で大きな違いがみられます。

日本は、伝統的にセクシュアリティについて非常に寛容な文化であったことが知られていますね。この枕本（資料９）はその１例で、新婚のカップルに対して、どういうふうに性行為をするのかを教えています。

資料９

これは香港で撮影したペニスの形をした岩石（資料 10）で、繁栄と生殖を願って、この岩石に祈りを捧げているところですね。インドにもエロティックな石像がたくさんある有名な寺院をはじめとして、さまざまにこうした物が残されています。

資料 10

■ 性教育

さきほど、1970 年代になって、性教育が医師に限らず、大学生、高校生あるいは幼稚園児など、その対象を広げて行われるようになってきたと申し上げました。しかし、そこでもまだ、解決すべき問題は残っていました。だれが性教育を教えるのか、ということで

す。年齢がいってる人のほうがいいのか（ほとんどの場合は、一番年齢が上の人が選ばれていたようですが）、結婚していなければならないのか、どういった態度の人がいいのか、どんな専門知識が必要なのか。

当初は、ほとんどの先生が、性について教えることについては「素人」だったわけです。しかし、性教育を教えるためには、専門知識を身につけなければならない、専門の教育課程を修了しなければならない、というふうに変わってきました。私は、1970年代後半に、日本の方々にも研修をするようになりました。

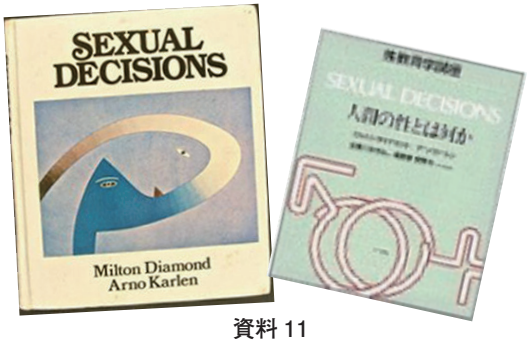
性教育に携わるなかで、後に私たちが気づいたことですが、ピア・エデュケーション（自分と同世代の人による教育）のほうが、性については、より熱心に話を聞いてくれる、うまくいくこともあります。

教育をするに当たって一番大切な要素は、まずきちんとした準備をすること、そしてオープンな態度をとることです。性に関する情報は、大人だけでなく子どもが入手できるものだし、またそうでなければならないと私は思います。

性教育をめぐる議論で、もう1つ論点になるのが、何を教えるか、ということです。性にまつわる負の側面（望まない妊娠や性感染症など）だけではなく、正の側面について教えてもいいのかどうか。性が悪い結果ばかりを引き起こすものだったら、だれも性行為をしないと思います。

1980年代には、私が書いた教科書（資料11）が出版されました。嬉しいことに、この本は日本でも、宮原忍先生によって日本語に翻訳され、日本の大学で初めて教科書として採用されたと、お聞きしています。幸運なことに、私が上梓した本は、たくさんの外国語に翻訳されています。

1980年代になって、エイズが世界的に流行し始めたことは、性教育推進の大きな追い風になるものでした。しかし、新たな問題も浮上してきます。エイズについてだけしか教えない、性行為に触れることなく、HIVの感染予防についてだけ教える、といった風潮が生まれたことです。



資料11

この写真（資料12）は、「見ざる、言わざる、聞かざる」を表現したものですが、従来の3匹に加えて、「（セックスを）せざる」という意味の4匹目が追加されていますね。

資料12

新しい時代の、新しい話題

社会における新しい動向、変化を加速した別の要因は、フェミニズムの台頭によって、女性たちが発言するようになったことです。女性たちは、従来の性や性教育が、男性の視点に偏っていると指摘しました。そうして、新しく登場した話題の1つが、セクシュアル・ハラスメント（セクハラ）です。

セクハラというのは、性的に相手の弱みにつけ込んだり、利用したり、相手が不快に思うことをする、というものです。米国では、最高裁判事の1人がセクハラで訴えられ、大きな社会的関心を集めるところとなりました。

1990年代に新しく登場した論争の1つには、同性婚をめぐる是非もあります。米国ではこれに反対する人が多い。しかし私は、学生が状況について理解できるよう、同性婚についても授業で扱ってきました。ちなみに、性教育で何を教えるべきかについては、米国にある50州のそれぞれにおいて、異なる法律が設けられています。

インターネットが普及したことで、検索できるポルノの数が飛躍的に増えました。ほとんどの教育者は、ポルノが性教育には使えない、といいます。しかし、最近論文で発表したのですが、チェコ共和国では、ポルノの数が増えるに従って性犯罪の数が減少するという、非常に興味深い調査結果が出ています。日本のデータからも同様の傾向が結論できるのではないかとい

うことで、現在調査しているところです。

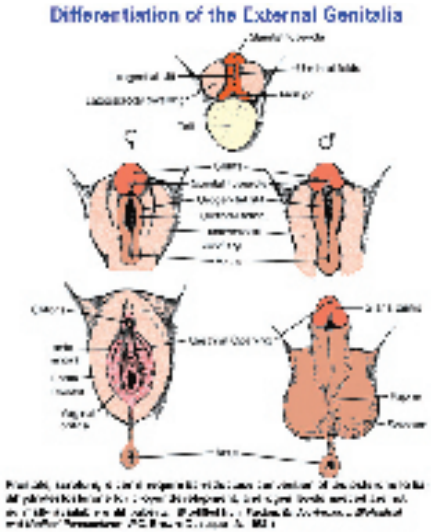
時代の変化とともに、従来では議論されなかった人々の性教育ニーズにも関心がもたれるようになってきました。たとえば、精神障害や身体障害のある人々、あるいは高齢者の人々です。性的な活動は、年がいったから、何歳になったからといって終わるわけではありません。障害をもつ人々も同じように、性的ニーズがあります。障害者と性については、専門分野として確立されており、特別な研修を受けた人々がこの教育や支援に取り組んでおられます。その他にも、たとえば乳がんや前立腺がんとセクシュアリティといった話題があります。

■性の多様性について学ぶ、教える

私は、同性愛やトランスセクシュアルについても教えていますが、もう１つの重要なテーマが、インターセックスです。性教育では、非常に広範なジェンダーについての事柄、あるいは性に関する活動について網羅する必要があります。

トランスセクシュアルについては、現在では、世界中のどこでも確認できる現象であることがわかっています。しかし、同じトランスセクシュアルでも、性器の形状を男性（女性）から女性（男性）のものに変えたいと思う人もいらっしゃれば、そのままに保ちたいという方もいらっしゃるなど、さまざまです。

インターセックスについて、少しご説明したいと思いますが、出生前、私たち全員の性器は、一番上の絵のような状態（資料13）、女性器でも男性器でもない状態にあります。しかし、妊娠６週目～12週目あたりになりますと、性分化が始まります。左の方向か、右の方向に分化が始まるわけです。



資料 13

しかし、「自然は多様性を愛でる」（Nature loves variety/diversity.）ものなのです。出生時の性器は、一番下の右と左の２枚目の絵にある形状のみならず、その間のあらゆる形状がありうるわけです。外性器だけでなく、内性器にも多様な形状もあります。精巣が１つと卵巣が１つという「真性半陰陽」の状態もあります。

私たちの性別は、性器の形状に基づいて宣言されたものです。しかし、ジェンダーは性器で決まるわけではありません。最重要である、一番メインとなる性器は、股間の間にあるもの（性器）ではなく、耳の間にあるもの（脳）なのです。

変化は、非常にさまざまなところで起こっています。女性の社会進出が進み、従来、伝統的な男性職業とされてきた仕事に就く女性たちも増えてきました。伝統的には女性職業とされてきた仕事に就く男性も増えています。性教育に携わる人々が明確に認識しておかなければならないのは、「多様性」です。

■性教育の３つのルール

最後に、皆さんに「性教育の３つのルール」をお伝えしたいと思います。

１つは、性に関して単純な事実というものなどない、ということです。すべての事実は、人や社会の態度と感情に彩られているものなのです。

２つ目は、真実を見分ける力が必要だということです。私たちはよく平均値だとか、全体的傾向について話をします。そして、私たちの多くは自分を基準にしがちです。しかし、「こうであるかもしれないこと」と「こうあるべきだと思うこと」には、明確な線引きが必要です。

３つ目に、私たちは性に関する知識と態度、そして実際に行われる行為のすべてが調和していると思いがちです。しかし実際には、これら３つの要素は独立したものなのです。

性教育の価値とは何でしょうか。性科学の価値とは何なのでしょうか。少なくとも、性教育や性科学はお金が儲かる仕事ではないでしょう。けれども、人生をより豊かに、幸せなものにすることができるものなのです。